親子読書のすすめ

島根県立図書館

島根県立図書館では、お母さん、お父さん、家族の方が、子どもに家庭で絵本を読み聞かせる「親子読書」をおすすめしています。
「親子読書」とは、絵本の読み聞かせによって親の言葉で子どもを包み、親子で絵本の楽しみをともにすることです。

◎肌のぬくもりを通して心のふれあいをする

子どもの言葉との出会いは、聞くことから始まります。子どもの聞く力は、赤ちゃんのときから、子守歌を歌ってもらったり、お話をしてもらうなかで育っていきます。ひざに抱っこされて絵本を読んでもらうとき、子どもは肌のふれあいを感じながら、お話をしてくれる人のぬくもりを全身で受けとめ、しあわせを感じるのです。

◎言葉の世界との出会いを大切に

子どもは、３歳頃になると、ある程度言葉を使って会話ができるようになります。また、おもいがけない言葉を発して周囲を驚かせたりもします。この頃から小学校低学年までは、言葉を吸収し、言葉でコミュニケーションをはかる能力が発達していく時期でもあります。この時期、どんな言葉に出会ったか、どれだけお話を楽しんだか、ということはその人の感受性に大きな影響を与えると考えられます。

◎言葉を通してイメージを描く楽しさを知る

絵本に描かれている絵は、物語の世界を子どもの心にひきよせ、広げてくれます。
絵を見ながら言葉をつないでいくことで、子どもの中にお話のイメージが芽生えます。この積み重ねによって、絵で描かれていないところまでイメージをひろげ、物語の世界で自由にあそぶことができるのです。
この楽しさを充分に味わうことで、子どもの中に、物語という目に見えない世界をいきいきと描き出す「想像力」が育っていきます。

子どもの頃に育まれた感受性や想像力は、やがて豊かな人生へと子どもたちを導いてくれるでしょう。そして、本はそのよき友となるでしょう。

★親子読書をすすめるにあたって

① 家族ぐるみで、生活のなかに位置づけて

お母さんだけでなく、お父さんの低い声も魅力です。おじいさん、おばあさんのゆったりした声もぜひ聞かせたいものです。
絵本を１～２冊、10分程度で、各家庭の事情で無理のない時間帯を選び、できるだけ毎日続けましょう。夕食後、就寝前などは、親も子も絵本に集中できます。

② 身近に本のある家庭環境を

身近に子どものための本を置いて、暮らしの中に本のある環境をつくりましょう。
子どもが手にとりやすい場所に本を置いておくのもよいことです。

★読み聞かせのポイント

① 自然な声で、素直に、ゆっくりと

大げさな抑揚や身ぶり手ぶりはいりません。文章にそって素直に読めばいいのです。
大人は文章に目が行きがちですが、子どもは絵を「読んで」います。ゆっくりと読んでください。

② むずかしい言葉が出てきても読み進める

子どもが知らない言葉が出てきても、ひとつひとつ説明する必要はありません。むずかしい言葉でも、前後の関係でわかることは多いものです。

③ 感想をむりに聞かないで

読みっぱなしでいいのです。心に思っていることを言葉で表現することは、子どもにとって難しいことです。子どもの自然なつぶやきを聞くだけでよいのです。

④ 字が読めるようになっても読み聞かせを続ける

文字がひろい読みできるようになっても、物語のイメージを描きながら楽しく読書ができるようになるまで、読みきかせを続けてあげてください。また、幼児期を過ぎても、読み聞かせは親子の楽しいふれあいの時間です。

掲載写真は「キラキラしまね笑顔で読み聞かせフォトコンテスト」の受賞作品です

★ひとくちQ＆A

Q：どんな絵本から読みはじめたらいいのですか？

A：あなたの気に入った絵本、子どもが気に入りそうな絵本を読んでみることから始めてください。
ながく読みつがれている本を選んでみるのも良いでしょう。このような本は、たくさんの子どもたちの心をとらえてきた魅力をもっています。

Q：よい絵本とはどのようなものなのでしょう。

A：絵に物語を語る力があり、文はいきいきとイメージをつたえ、さらに、本としてのつくりがきちんとしているものが良い絵本といわれています。ながく読みつがれている絵本は、この条件を満たしているものばかりです。
また、県立図書館では、読み聞かせに向く絵本を『おすすめしたいこどものほん』で紹介しています。

Q：同じ本ばかり読んでとせがむのですが。

A：つぎつぎとたくさんの本を読み聞かせなくてもよいのです。
「もういっぺん読んで」とせがまれる本は、子どもの心をしっかりとつかんだ本です。
子どもは、気に入った場面や心地よい言葉をあなたとともに体験できるひとときが、楽しくてしかたないのです。お気に入りの本ができたら、何度でも読んであげてください。

★ながく読みつがれている絵本の例

書　　名	著　　者	出版社
いないいないばあ	瀬川康男絵　松谷みよ子文	童心社
くだもの	平山和子作	福音館書店
しろくまちゃんのほっとけーき	わかやまけん絵　わだよしおみ文　森比左志文	こぐま社
ももたろう	松居直文　赤羽末吉絵	福音館書店
わたしのワンピース	にしまきかやこ絵と文	こぐま社
三びきのやぎのがらがらどん	ノルウェーの昔話　マーシャ・ブラウン絵　瀬田貞二訳	福音館書店
てぶくろ	エウゲーニー・M・ラチョフ絵　うちだりさこ訳	福音館書店
どろんこハリー	マーガレット・ブロイ・グレアム絵　ジーン・ジオン文	福音館書店
はらぺこあおむし	エリック・カール作・絵　もりひさし訳	偕成社

（『おすすめしたいこどものほん』より）

聞くという読書（抜粋）

―言葉を共有し喜びを共にする体験を―

福音館書店相談役　松居　直氏

本は言葉の世界です。活字の向うに広がるのが本という言葉の世界です。読書という行為は、その言葉の世界へ深く入りこむこと。言葉の世界を旅することです。文字を読むという技術は、言葉の世界へ入りこむ手段の一つですが、文字が読めても、言葉の世界へ入りこむ力がなければ、読書はできません。言葉の世界へ入りこむもっとも大切な体験は、語られたり声に出して読まれたりする言葉を、耳で聞いて自由自在に言葉の中に入りこむことにつきます。〝聞く〟力が身についていて、はじめて〝読む〟という技術を駆使して読書ができます。

文字が読めることはすばらしいことですが、現在の文明の発達したこの情報化社会では、もう一度言葉を〝聞く〟、それも人が人にじかに語りかける言葉を聞くことからやり直さなければ、読書の継承も推進もむずかしいかと考えます。

読書力を育て養うには、まず乳児期に親が子どもを抱いて語りかけ、唄いかけること、つまり言葉で子どもを抱いて育てることです。ついで幼児期には、子どもを膝に座らせて、昔話を語ってやり、絵本を読んでやることです。さらに小学校中学年ぐらいまで、家庭で本を読んでやることです。特に父親が読んでやることが、今はとても大切です。

〝読み聞かせ〟といわれている行為の最大の意味は、親と子が共に居ること、言葉で子どもを包んで、言葉の楽しみを共にすることにありましょう。これこそが家庭での生活体験の中心です。そこには心と心が通い合う時間と空間があり、親の思いが自然に抵抗なく子どもに伝わる、人生体験があります。親とは語る人です。

それと同時に、保育や学校という集団生活の場で、先生方が日々、子どもたちに本を読んでやる―教えるのでなく、ひとりの大人として語りかける―ことが大切です。友達といっしょに言葉を共有し、喜びを共にする体験は、生きる力です。小学生だけでなく、中学生にも、教室で本をもっと読んでやってほしいものです。聞く力が教育の土台です。

（社団法人読書推進運動協議会機関誌『読書推進運動』
３６９号巻頭「聞くという読書」より後半部分抜粋）